

上海⇄東京

子育てメール便(5)

橋本雅子
津守多実

まさことたみは東京の養護学校での仕事を通じて知り合った子育て仲間。まさこの子ども愛佳は三歳女児。たみの子どもクナは五歳男児。まさこ一家が夫、申屠（スンドウ）の出身地である中国上海に転居し、上海の暮らしがスタートしました。祖父母が子どもと一緒にいる状況が多い上海の様子を題材に語ります。

親代わりの上海の祖父母

まさこ 最近、申屠の友達、いとこたちと会いました。お互いに結婚し、子どもが生まれ、数年ぶりの再会に話題は事欠きません。ただ、夫婦で来ても子ども同伴が少なく、事前に子どもと来てもらう

よう頼みました。ところが子どもが両親との外出を嫌がり、自宅に祖父母と待っている話を聞いたリ、友人親子を誘ったら、二歳にして初めて、親子で出かけると打ち明けられたりしました。会食では、私と愛佳のやりとりを見て、「いいねえ、親の言うことをちゃんと聞いて。うちは祖父母の言うことは聞くけど、親の自分が言っても全然話をきかない」と嘆かれ、驚きました。

私は、中国の祖父母も日本同様に、手助けの範囲で孫の世話をしていると想像していました。ところが、夜遅くまで仕事する家庭の場合、夫婦それぞれの祖父母に交

替で子どもを託して連泊させ、日常生活の大半を任せることも珍しくはないようです。親は子どもを預け慣れていて、休日も育児を頼む場合があります。こうした事情のためか、祖父母が親の役割を担い、孫も祖父母を親のように慕う現実が見えてきました。

愛佳の発熱で通院した際にも、子ども一人に三、四人の大人が同伴する様子を多く目にしました。診察室前には「入室は子ども一人に付き大人二人まで」との看板が掲げられています。

制度的、経済的に祖父母が育児を引き受けざるを得ない実情、一人きりの孫に対する責任の重さ、

高齢ながら長時間育児する体力的な大変さなど、育児担当の祖父母は心身ともに大きな負担を感じているように思えます。

日本の祖父母と孫親子

たみ 日本では、祖父母といっても五十代〜八十代までと、年齢も状況も多様です。また現役で仕事が忙しく、また退職後趣味に没頭していて、あるいは高齢で病气や介護中など、祖父母が育児に全面的にはかかわらない事情が個々にあり、仕事があっても保育園を利用しながら親が育児をするのが一般的ではないでしょうか。それでも、臨機応変に子どもと

自身の生活をまわしてゆくためには、祖父母の家の近くに住み、育児を手伝ってもらうのが理想、というような風潮があります。私の近辺でも、祖父母が保育園や幼稚園への送り迎えをしたり、公園や児童館で親の帰りを祖父母と待っている幼児の姿を日常的に見かけます。一時的な預かりのためか、幼稚園のお迎えではいつもはほかの子と遊びふざけながら帰る子も、祖父母とはしつかりと手を握って、神妙にそそくさと帰ってゆきます。

公園で見かける祖父母たちは、親のように公園外交に神経を使うこともなく、ゆつたり遊んでいる

ように見えます。しかし、祖父父母世帯が現役だったときから子育て環境は大きく変わり、子どもを飽きさせずに過ごすのには便利になった反面、祖父父母にとって孫のかかわりは気を遣うことが多いかもしれません。孫をめぐる子ども夫婦とのあつれきもよく耳にし、雑誌などでは「孫育児」が話題に上ります。

「ゆっくり早く」の育児

まさこ 先日、お昼寝後に小公園へ散歩したときのことです。愛佳は時どき遊ぶ七歳のお姉ちゃんを探しましたが、いたのは初対面の三歳近い女の子とおはあさんらし

き女性の一組だけでした。私たちを見て、そのおはあさんは「一緒に遊ぼう」と声をかけてきました。その孫が持参したボールをけるうちに愛佳と追いかけてこをし始め、二人の間に笑顔が生まれました。ところが、ふわっとおもしろさがふくらんで走りだすと、おはあさんは「ゆっくりゆっくり！」と叫びます。それこそ市場で買物をするような勢いの、大きな声です。孫の子どもらしい活発な動き方が気になるようで、幼児向けのゆるやかな滑り台をすべるときも、数段の低い階段を上がるときも「ゆっくりゆっくり！」と言います。愛佳も気にして走るのをや

めるほどです。そうかと思えば、二人が滑り台で遊んでいるところへ「チツ」と舌打ちをしながら来て「ほら、ボールで遊びなさい！早く早く！」と声をかけてきます。孫は再びボールを取りに行きます。ボールが転がった先に生えたツタを見て、ひっぱろうとすると「何をしているの」とすごい剣幕で走り寄り、孫のお尻をたたきます。その後、膝の高さの石段に二人が上がると「早く降りなさい、早く早く！」。降りた二人が走り始めると「ゆっくりゆっくり！」。また石段に上ろうとすると舌打ちをして、眉をひそめて私に孫の文句を言います。孫は言われ慣れて

いるのか、お尻をたたかれたり、ひっぱり下ろされても、また同じ場所へ上がります。そのうちに、あきらめない孫の姿を見て、おばあさんは笑います。むしろ愛佳が一連のやりとりに萎縮し、動かなくなりました。私もつい「ゆっくりとか、早くとか、どうしたらいいんだろうね」と言い、どう振舞うべきか戸惑いました。

かたい表情の愛佳を見て、私は別の展開を期待し、葉を摘み、枝に刺しました。愛佳も落ち葉を拾い始め、孫も夢中で葉っぱを枝に刺します。ピースの糸通しのような遊びになりました。おばあさんの視線に気づき、孫が叱られるか

とはつとしましたが、大人の私が始めたためか、できたものを贈られて笑い、喜んでいるようでした。まもなく、足けり乗用玩具に乗った男の子が別の祖父と来ました。その乗り物をボールと交換して借り、孫と愛佳は一緒に乗りました。おばあさんは何も言わずに見ていました。

彼女の言動から察するに、ただ走り、段に上がることは、怪我の危険がある動作でしかなく、「遊び」とはボールけりや足けり乗用玩具に乗ること、とも解釈できます。たみ ゆっくりと言いながら急がせること、大人時間を生きている大人の目線の強さを感じます。私

も、自動車教習所でよく教官から「ゆっくり！ いそいで！」と声を荒げて言われました。路上の危険があるので当然のことですが、技術を習得した人から未熟な者への言葉でもあります。毎日ずっと孫と過ごすとなると、教育的に子どもに体験させたい遊びのイメージがあるようにも感じました。幼児の動きを危なく感じて制したくなり、させたい遊びがうまくいかないと急がせたくなり、「ゆっくり、いそいで」の言葉となるのでしょうか。

まさこ 祖父母が親だった時代は、夫婦でフルに働き、自分の子は国営企業の保育施設に預けた

り、家族が世話していたのでしょう。孫育児が初めての育児といえるのかもしれませんが。

その後も何度か二人を見かけたものの、遊ぶ機会がないまま日が過ぎました。ある日、市場帰りのおばあさんに出会いました。孫連れでない理由を尋ねると、世話が大変なために二歳で幼稚園に早期入園させたとのこと。「公立で費用を抑えた分、おいしいご飯を作ってあげるんだよ」と、買った川魚を見せてくれました。彼女のくつろいだ表情を私は初めて見ました。

たとえば愛佳の祖父は、六十代初めで多趣味、子ども好き、とバイタリアティにあふれています。言

葉の通じない愛佳と身振りを交えて動物ごっこをし、短時間ながら全力で遊び、疲れるとベッドで休みます。愛佳はそんな祖父をすくに好きになりました。一方で、公園のおばあさんも愛佳の祖父と同年代に見えますが、孫とじっくり過ごせる魅力的な時間をもちながら、余裕のない心境でつきあい、子どもの動きをコントロールしたくなる状況を残念に思います。

三世代育児と核家族

私たち夫婦は、以前は核家族だったために、大人ペースで生活しないことに割り切ることができ、愛佳のリズムを想定して予定を組

みやすく、あまりせかさないうで済む生活を送っていました。今は同居するほかの家族の生活リズムを考えると、誰もが我慢し過ぎないよう心配することが必要になります。

東京にいたころ、祖父母にあやされながら散歩する幼児を近所でよく見かけました。私たち夫婦の実家が遠いために、愛佳に与えられないかかわりを思い、寂しい気持ちになることもありました。

今、祖父母や親戚知人から親しげに相手してもらった愛佳の様子を見ると、親密で雑多なかかわりが身近にある贅沢さに、しみじみと感謝しています。

ただ上海に来て、ゆっくり過ご



すよつ促されると同時に、急ぐ事情がなくても「早く早く」と愛佳がせきたてられることが多く、自分でやりきる体験が減っています。上海で生まれ育った申屠も「のんきだけど、せっかちだよね」と、いまさらながら驚いています。多人数きようだい時代から、一人っ子政策で子どもが減り、子どもの感覚が忘れられているような、大人中心の価値観を肌で感じます。

たみ 社会の状況や、大人の都合のしわ寄せが、高齢者と子どもに

及んでくるということ。上海ほどではないながら、日本も同じことでしょう。幼児の生活ペースは大事ですが、祖父母もまた高齢になってゆくほどに、自分の生活習慣を保つことが心身に必要なことでもあります。

わが家では、私が週一、二回の仕事や用事するときには、私か夫の両親にクナを預けています。不定期に働いている私にとって、祖母の支えなしには社会生活は営めません。祖父母はクナと一緒のとき、じつくりと庭仕事などしながら遊んでくれ、クナの満足そうな顔を見ると、助かるというだけではなく、親では与えることのでき

ない豊かなときを過ごしているとホッとします。でも、仕事の都合で迎えが遅くなったとき、薄暗くなつた夕食前の時間に、ビデオを見ながらお菓子をほお張っているクナの傍らで祖父が居眠りしていることもあります。

仕事社会の時間配分ではいけないと、祖父母と孫が、無理なく穏やかに過ごせるような時間の感覚でいなければと、反省を込めて思っています。

津守（愛育養護学校、造形アート遊びの提案・研究をしている）
橋本（元愛育養護学校、現在は母親としてクリエイティブ保育を志す）